

PROGRAM
A.スカルラッチィ
すみれ 私は心に感じる
F.ガスパリーニ
あなたへの愛を捨てることは
A.チェスティ
歌劇《オロンテア》より 「私の偶像である人のまわりに」
S.ドナウディ
いま緑の香りが戻り あぁ 私のいい人 いつまた君に逢えるだろうか
P.マスカーニ
花占い
O.レスピーギ
霧
R.レオンカヴァッロ
朝の歌(マッティナータ)
—❦—
G.プッチーニ
歌劇《つばめ》より 「お金のほかには何もないんだわ! ～ お嬢さん、愛が花ひらいたよ」
歌劇《トスカ》より 二重唱「マリオ! マリオ!ここにいるよ!」※ アリア「歌に生き、愛に生き」
歌劇《ラ・ボエーム》より 「あなたの愛の呼ぶ声に」
歌劇《蝶々夫人》より アリア「ある晴れた日に」 二重唱「夕暮れは迫り」※

※工藤和真(テノール客演)

PROGRAM NOTES
世界で活躍するソプラノ、中村恵理がテノールの工藤和真を迎えて行うリサイタル。今回は後半にプッチーニのオペラを特集し、前半もイタリア語の曲をそろえたオール・イタリアの充実したプログラムとなっている。 第一部はナポリ楽派オペラの始祖といわれる作曲家 アレッサンドロ・スカルラッチィ(1660-1725)の二曲でスタート。「すみれ」はアドリアーノ・モルセッリ(生没年不詳)台本のオペラ《ピッコとデメートリオ》からのアリア。後にイタリア古典アリア選集に収録されて広く知られるようになった。身分違いの恋に悩む若者が、菫の花に想いを託して歌う軽快なテンポの曲。次の「私は心に感じる」は室内カンタータとして書かれた曲で作詞者不詳。愛の予感の痛みをシンプルな旋律に乗せて歌う。 フランチェスコ・ガスパリーニ(1661-1727)の「あなたへの愛を捨てることは」は1695年にローマで出版された室内カンタータ。ガスパリーニはスカルラッチィと同年輩で、オペラやカンタータで活躍した。愛の苦しみと諦念を短調のおだやかな旋律で示した優美な曲。 次はアントーニオ・チェスティ(1623-1669)の代表作であるオペラ《オロンテア》(1656)からアリア「私の偶像である人のまわりに」。エジプトの女王オロンテアは決して結婚をしないと決めていたが、美しい画家アリドーロと出会い彼に恋してしまう。このアリアは第二幕で気を失って倒れているアリドーロの前に、オロンテアがそれまで隠していた愛する気持ちを歌うアリア。 ステーファノ・ドナウディ(1879-1925)はオペラも何本かあるが、歌曲で有名な作曲家だ。今日歌われる三曲はすべて弟アルベルト(1880-1941)の作詞。「いま緑の香りが戻り」は春の野へ踊りに誘う曲。「あぁ 私のいい人」は愛する人を失った悲しみが甘い追憶として歌われる、多くの人に愛される名曲。「いつまた君に逢えるだろうか」は恋人が心変わりした事への苦々しさと、いまだ残る一抹の希望のあいだで揺れ動く心を歌う。 ピエトロ・マスカーニ(1863-1945)の「花占い」は、1884年、マスカーニがミラノ音楽院の学生時代に作曲された。作詞は彼のオペラ台本も数多く手掛けているジョ

ヴァンニ・タルジョーニ＝トッツェッティ(1863-1934)。16分音符の素早いパッセージのピアノ前奏に続き、花びらを一枚ずつ数えて愛を占う様子が歌われる。

交響詩《ローマの松》などの『ローマ三部作』で知られる**オットリーノ・レスピーギ**(1879-1936)は、近代イタリア音楽を代表する作曲家の一人で、オペラや歌曲の分野でも重要作品が多い。「霧」は1906年にレスピーギの出身地ボローニャで出版された。同時代の女性詩人アダ・ネグリ(1870-1945)の「光」「霧」「雪」という三つの詩に曲をつけており、「霧」は、霧に覆われた暗さに孤独を重ね合わせた情景を描く。レント(遅く)の和音のみで進行するピアノが重い足取りを思わせる。

「**朝の歌**」は、オペラ《道化師》が有名な**ルッジェーロ・レオンカヴァッロ**(1857-1919)の名曲。レオンカヴァッロは文才があり、《道化師》の台本やこの曲の作詞も手掛けている。「朝の歌」はレコード会社グラモフォン・カンパニーの依頼で作曲された。ナポリ出身の伝説のテノール、エンリコ・カルーゾの歌、レオンカヴァッロのピアノによる録音(1904)が有名である。曲は16分音符の三連符を繰り返す軽やかなピアノに乗ったリリックな美しい旋律で始まり、やがて情熱的な盛り上がりを見せる。



第二部は**ジャコモ・プッチーニ**(1858-1924)の名作オペラからアリアと重唱が歌われる。《**つばめ**》はジュゼッペ・アダーミ(1878-1946)の台本。舞台は19世紀の第二帝政期のパリと南仏リヴィエーラ。銀行家ランバルドの愛人として暮らしているマグダは、彼女の贅沢なサロンで友人たちに、ごく若い頃に若者と恋に落ちた思い出を歌う。

《**トスカ**》は1800年のローマを舞台に、オペラ歌手フローリア・トスカと、革命派の画家マリオ・カヴァラドッシの

オペラ・キュレーター：井内美香

悲恋を描く。一曲目はテノールの工藤和真との愛の二重唱。第一幕、警視総監スカルピアに投獄された前共和国の要人だったアンジェロッチィは脱獄し、カヴァラドッシがマグダラのマリアの絵を描いている教会に逃げ込む。カヴァラドッシが事情を知りアンジェロッチィを助けようとしたまさにその時、トスカが恋人に会うために急に教会に来る。カヴァラドッシは友人を一時的に隠して何食わぬ顔でトスカを迎える。二曲目は《**トスカ**》第二幕から、よく知られているトスカのアリアをお聴きいただく。スカルピアはアンジェロッチィを匿った咎でカヴァラドッシを逮捕。彼の命と引き換えにトスカに愛の一夜を要求する。信心深いトスカは神に酷い運命を嘆く。

《**ラ・ボエーム**》は19世紀半ばのパリを舞台に、若い芸術家たちの青春を描いたオペラだ。ある日、屋根裏部屋で出会った詩人ロドルフォとお針子ミミは恋に落ち一緒に生活を始める。今日歌われる場面は第三幕、雪が降り積もる市外との境にある酒場。ミミは喧嘩をして家を飛び出したロドルフォを探して来る。ロドルフォが友人マルチェッロに、ミミの病気が心配でもう自分とは別れるべきだと話すのを物陰から聞いたミミは彼の前に姿を現し、アリア「**あなたの愛の呼ぶ声に**」を歌う。

最後は日本を描いた傑作オペラ《**蝶々夫人**》から。19世紀末の長崎。武士の父親が死に、芸者になった15歳の蝶々さんは、アメリカ海軍士官ピンカートンと結婚するが、やがて夫は彼女を残して出航する。最初に歌われるのは第二幕の有名なアリア「**ある晴れた日に**」。ピンカートンが出航してから3年が経ち、夫の帰りを一途に待つ蝶々さんの言葉に、使用人のスズキはついに泣き出してしまう。蝶々さんは彼女に、ピンカートンが帰ってくる日の情景を歌う。

本日の締めくくりは《蝶々夫人》からの二重唱だ。場面は第一幕最後。蝶々さんとピンカートンは結婚式をあげるが、蝶々さんが密かにキリスト教に改宗したことを知った彼女の叔父の僧侶が怒って登場する。親戚や町の人々が皆立ち去った後で、ピンカートンは泣いている蝶々さんを慰める。やっと親密な時間が訪れた二人は、愛の二重唱を歌いあげる。